世田谷区清掃事業の現状と課題

いま No.50
清掃事業は・・・
▶▶▶▶ 世田谷区

「ごみ減量」と「住民サービス」

収集・運搬・処理・処分のみが職員のコア業務だと信じ伝えられていた時代も、社会の変化と区民から求められるサービスが多様化してきたことで、その神話も変遷を遂げてきた。かつて、最終処分場の延命化のために取り組まれた「ごみ減量」は、資源循環を目的としたごみ分別ルール変更、各種リサイクルの推進を経て、一定の成果をあげた。

今は、海洋プラスチック汚染や気候変動の危機をとめるため、ごみ焼却による二酸化炭素排出の抑制、廃プラの分別回収・再資源化が努力義務化された。

二つの清掃工場を抱える世田谷区は、さぞかし環境に配慮した最先端の資源リサイクル事業が実施されているものと思われがちだ。

しかしながら、内情は区民意識の中に、プラスチックの資源化は浸透しておらず、どちらかと言えば、不燃以外は何でも一度に収集される、他区にはない特別な「行政サービス」と思っている区民の方も見受けられる。

当然、ふれあい指導や環境学習において、「ごみ減量」のための正しいごみ分別・リサイクルの重要性・〈ごみを出さない〉生活スタイルの提案を、職員は区民に責任を持って説明している。

コロナ禍において、90万区民が一斉に家中の不要品を片付け始め、集積所に排出したことで、ごみ量が激増してしまった。それまで「ごみ減量」を目標に奔走していた、ふれあい指導班の喪失感は記憶に新しい。

だが現在は、その努力がごみ量減少に大きく貢献したことは言うまでもない。

▲ごみ減量のために調査

新たな「ごみ削減」策の提案

区清掃事業で課題となるのは、可不燃ごみ・資源の減量だけではない。住宅地でもある当区にあって、大型家具・家電、樹木などの粗大ごみ回収量はとどまるところを知らない。また、申込者の高齢化も進み、自力で屋外に搬出することが困難な方も多い。そこで、運び出し回収を専門とする地域機動班を設置し、要望に応えることで、高齢者へのサービスを拡充した。

▲粗大ごみのリユース事業

回収した粗大ごみの中には、ごみにするには惜しい、再利用できるもの、価値の高いものが多くあることも判明した。もし、それをリユースに回したら、粗大ごみ減量・一定の区収入も見込めるのではないか?と「職員側から提起」し、執行課と民間事業者の協力のもと、新たなサービスとして取り組む実証実験を行った。区民からも好評で議会の賛同もあり、4月から本格実施となった。

プラスチック資源化の動きは鈍い世田谷で、作業計画での減車提案の不安もありながらも、職員が懸命に「ごみ減量」を区民に訴えつづけ、自ら新たなサービスを提案することは、地域の環境を考える職員の社会的な役割だと感じてやまない。

（世田谷区担当中執　徳山　清治）

助け合いの精神！それが労働組合だ!!
継続的な新規採用を勝ち取ろう

5月19日（金）日本教育会館において、東京清掃本部と青年部共催による2023年度採用の新入組合員歓迎学習会を開催。今年度採用された18区と一組から多くの仲間が参加し、労働組合の必要性と共済活動の重要性を学びました。

主催者を代表し多田委員長からは「労働組合は仲間同士の助け合いの場であり共済も助け合いの精神からできている。困った時は組合に相談を」「仕事をするうえで安全に勝るものはない」と話されました。その後、本部青年部自主製作のDVDを鑑賞、山口本部青年部長は「職場はバラバラかもしれないが、みんなの気持ちは一つにということで、横の繋がりや情報を共有する機関として青年部活動を活発にしていきたいので参加をお願いします」と新たな仲間たちへの呼びかけがありました。次に自治労共済についての講演、制度の説明があり、最後は山口本部青年部長の発声による団結がんばろうで締めました。

▲70名の新規採用者参加

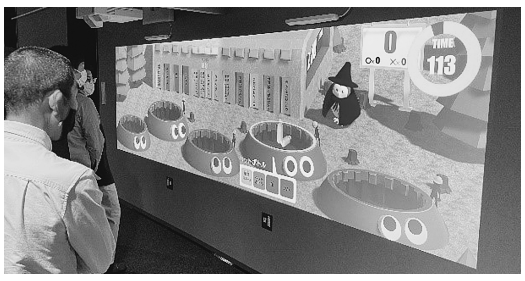
今年の歓迎学習会は感染対策を講じ、限られた時間での開催となりましたが、引率者を含め115名の参加がありました。来年こそは交流も含めた歓迎会が開催できればと思います。

現業職については、今年度は18区と一組で83名が採用されました。この間の各区・一組交渉の強化により、一時は100名を下回っていた青年部も、現在では200名を超える組織となっています。さらなる上を目指し、全区で継続的な採用ができるよう、引き続き各区における自治研活動を取組みながら交渉を強化していきましょう。

（泉田　和明）

リサイクル促進・啓発活動の手法を学ぶ
清掃部会職場視察交流会に参加
自治労都本部現業評議会

6月10日（土）、都本部現評清掃部会が開催した職場視察交流会に東京清掃より11名が参加し、他単組から参加した仲間とともに、八王子市・館クリーンセンターと町田市・バイオエネルギーセンターを見学しました。



▲子どもが楽しみながら学習できる工夫

館クリーンセンターは工場見学を充実させるための見学コースが作られているだけではなく、災害時に市民が活用できる施設（シャワー室など）なども作られており、市民に身近な清掃工場でした。

バイオエネルギーセンターは様々な形で埋め立てるごみの減少を取組んでいる一方、生ごみを発酵させて発生したガスを使った発電施設（バイオガス化施設）によってさらにリサイクルを促進していました。

どちらの自治体も埋め立てるごみを限りなく少なくする取組を進めた上で、発生する廃棄物をいかに資源やエネルギーに変えるかという課題について真剣に考え、リサイクルや発電を行うために必要な施設となっていました。

▲町田市バイオエネルギーセンター

23区における様々な資源化・エネルギー活用には課題が多いですが、今回学んだことを活かして取組を進めていきます。

（萩原　崇氏）

《ひとこと》

江戸川区が新規採用を再開して3年目になる。4名、3名、今年は6名と採用された。青年委員会も立ち上げ、役職も決まり前に進み始めた。前回書かせていただいた時は、受け入れる側の不安を書かせてもらったが、この問題を解消するには採用を継続することが世代時代のギャップを埋める近道なのかなと感じている。

組合活動、特に執行部を維持することは各支部で大きな問題になっていると思う。東京清掃労働組合が一番苦手としている「育成」の部分。よく聞くセリフで「若手の育成」という言葉がある。聞こえは良いが、「育成」ではなく「押し付け」じゃないか?やり方、考え方はいろいろあると思うが、現役でいる間は先輩が先頭に立ち頑張りましょう。いずれ引退の時は来るのだから。

当局との関係性はとても大切だと思う。当局は敵ではない。敵対心を見せたら相手は斜めに構えてしまう。どんなに大切な内容でも斜めに構えた相手は正面を向かない。しっかり正面切って話すには信頼関係は絶対に必要だと思っている。これも結構大変です。

（江戸川区担当中執　金子　達也）